

# 蘇合香の謎 雅楽と香料

長谷川景光、事務局

## はじめに

私は、平安朝雅楽の龍笛、大箏、楽琵琶奏者として活動し、奏者の育成も行っている。



合わせて、半世紀に亘る楽理研究の応用として古雅楽譜の解説・校訂研究と古雅楽楽器の研究、復元製作、そして出版活動、さらに、平安時代の薫物・香の復元を行っている。

さて、雅楽の演目に盤渉調の「蘇合香（そこう）」というのがある。「万秋楽」「春鶯囀」「皇聲」とならび格調高い四箇大曲のひとつである。

「蘇合香（そごうこう）」の名は、香料、薫物・組香、漢方などの中にも見られる。

## 雅楽について

雅楽は、そもそもその起源によって三種類に分けられる。

### 1. 『国風歌舞（くにぶりのうたまい）』

日本古来の歌謡と舞（歌舞）。

神楽、東遊、大和歌、久米舞などである。主に宮廷の行事や儀式で演奏される。

### 2. 『大陸系の舞楽』

仏教の渡来と前後して、飛鳥時代から平安時代にかけて、朝鮮、中国などから伝来した音舞楽踊をもとに国風化された舞楽。

### 3. 『歌物（うたもの）』

日本古来の民謡を編曲したり漢詩に旋律をつけたりして、唐楽風の器楽演奏とともに歌う歌謡。

平安の煌びやかな貴族文化を受け継ぐ雅楽は、1200年以上の伝統を有し音楽文化財として貴重な歴史的価値を持っている。2009年、ユネスコの無形文化遺産に登録されている。



舞楽 蘇合香（後編）他 国立劇場  
宮内庁式部職楽部 2012年

## 雅楽としての蘇合香（そこう）

さて、雅楽は中国から伝わったものであるが、肝心の中国では雅楽は伝承されていない。雅楽の「蘇合香」は、開元（713 - 741）の頃に演奏されたとする以外、その具体的な舞い方や舞人の装束などの詳細はわからないという<sup>13)</sup>。

残念ながら、現存する中国の史料を通しては、「蘇合香」が軟舞であること以外、その具体的な舞い方や舞人の装束などについて知る由もない。

日本には、桓武天皇の延暦年間（782 - 806）に遣唐舞生の和邇部島継（わにべのしまつぐ）が、「蘇合香」を伝えたとされる（序二帖など一部が失われている）。

物語は、雅楽曲の由来や演奏の仕方について様々の口伝を書き記した『教訓抄（1233）』により知ることができる。『教訓抄』は、興福寺の雅楽家狛近真（こまのちかざね）によって編纂され、楽書として名高い。狛近真は舞、笛の両道に優れ、「舞曲の父、伶楽（音楽）の母」と称された。

この『教訓抄』によると、曲の作者は中国の陳後主との説もあるが、物語はインドの阿育王（アショーカ王）の作として綴られている。

それによると、「アショーカ王が病気を患われたとき、蘇合香という草を薬にしなければ存命できないと言われた。一国の大事であるため、求めてまわったけれども、手に入れることができなかつた。7日後に、この草をようやく手に入れることができ、病氣も回復した。これを喜んで作った」という。舞はアショーカ王の弟<sup>9)</sup>、育偈（いくげ）の作といわれる。この草を甲（冠）に仕立てて、舞ったところ、御殿の中が香りでいっぱいになったという。この草の名「蘇合香」をもって楽曲の名としたとある。



蘇合香 『信西古楽図』

平安時代の舞楽、雑楽、散楽などの様子が描かれた『信西古楽図』には「菖蒲の甲」を被った舞人が描かれている。

現在も、この曲の舞は菖蒲甲（しょうぶこう）と称する蘇合香の葉を模した甲をつけて舞う。

### 植物としての蘇合香（そごうこう）

蘇合香については、不明な点が多い。

蘇合香と呼ばれる植物基源（生薬のもととなる動植物の学名とその薬用部位）は歴史的に変遷しており、一種ではない。

『香料博物事典』によると、中国でいう「蘇合香（スチラックス）」は、次の5つの樹種の樹脂を包含しているという。

- ① *Styrax officinalis*. バルサムよりの芳香性固形レジン。古代ストラックス（完全に姿を消す）。
- ② *Liquidambar orientalis*. 蘇合香油（流動蘇合香油）すなわちストラックスと通称するもの（現在、香料として使用しているもの）。

③ *Liquidambar formosana*. 南シナと台湾に出す。中国では古く楓香脂といった樹脂。

④ *Liquidambar styraciflua*. 北アメリカの固形樹脂。

⑤ *Altingia excelsa*. ビルマ・ストラックス。

五、六世紀以来、中国で称されている蘇合香は、①の古代のストラックスを指していたようだが、偽和物あるいは不純物が多く伝播していた。『後漢書』『梁書』『広志』などの伝える時代の蘇合香は、②の蘇合香油の方を指しているのではないかという。

しかし、『教訓抄』の伝える物語では、蘇合香は「薬草」となっている。さらに蘇合香の葉を模したといわれる菖蒲甲をつけて舞う。

ここに挙げられた蘇合香は、いずれも菖蒲の近縁種ではないため、形状が異なる。雅楽に登場する蘇合香（薬草）の素性については実のところよく分からない。

中国では、これ以外に「蘇合国」や「大秦国」に生えているもろもろの薬草を混ぜ合わせて煎じた汁とする伝承があるという<sup>13,14)</sup>。

『匂い・香り・禅』には、「蘇」とは牛乳の濃縮クリームのようなものであり、薬草（香料）を混ぜる基剤として用いたのではないかという推測がある<sup>12)</sup>。

ところで、日本では、菖蒲の葉は刀に似ていること、爽やかな香りを持つことから邪気を祓うとして、平安時代には宮中で端午の節句の行事として、「菖蒲葺き」、「菖蒲の輿」、「菖蒲枕」、「菖蒲刀」、「菖蒲の鬘」、「菖蒲の兜」、「菖蒲根合」などが行われていた。

### 雅楽の今

明治時代に入ると、各地で独自に伝承されてきた雅楽を統一する作業が行われた。この時、継承していく曲を選ぶ明治選定が行われた。この明治撰定譜に入らない曲は遠楽と呼ばれる。しばらくして、これらを復曲する活動も行われるようになってきた。

さらに、平安当時の演奏を再現しようとする試みも行われている。

日本の雅楽は、唐風の文化を日本にふさわしい形に作り変える「国風化」したものである。ここに平安から受け継がれてきた日本の雅楽の奥深い魅力がある。

## 長谷川景光 プロフィール：

- ・平安楽舎楽長（横笛、大箏、楽琵琶奏者）
- ・平安楽舎雅楽研究所
- ・神奈川大学 講師（平安朝香道初代宗師）
- ・『構造音楽理論』の楽理研究・執筆  
（平安朝雅楽譜の解説校訂・復元（『新撰楽譜』  
『龍笛譜』『三五要録』など）
- ・著書：『平安朝龍笛要録』『高麗十个秘曲輯』  
『龍笛古譜七調撰集』『古今神楽笛譜』など
- ・CD：『源博雅の龍笛～蘇る最古の笛譜～』  
『わくらば 平安の調べは美しく、そして悲しく』  
『平安の香り 現代雅楽三重奏』には、「平安朝雅  
楽盤渉調 蘇合香入破」の復曲を収録

## 参考文献

- 1) 思託『唐大和上東征伝』天宝 12 年 753
- 2) 作者不明『信西古楽図』平安時代
- 3) 惟宗俊通『香字抄』永承 2 年 1047 頃
- 4) 裴宋元、陳師文等『和剂局方』大観年間 1107～  
1110
- 5) 藤原範兼『薫集類抄』長寛年間 1163～1165
- 6) 伯近真『教訓抄』天福元年 1233
- 7) 四辻善成『河海抄』貞治 6 年 1367 頃
- 8) 曲直瀬玄朔『医学天正記』慶長 12 年 1607
- 9) 豊原統秋『体源鈔』永正 9 年 1512 頃
- 10) 許浚『東医宝鑑』1613
- 11) 安倍季尚『楽家録』元禄 3 年 1690
- 12) 関口真大著『匂い・香り・禅（東洋人の知恵）』  
日貿出版社 1972
- 13) 山田憲太郎『香料博物事典』同朋舎 p191 1979
- 14) 王媛本『西域の香料・東の舞-蘇合香についての  
文化史的一考察-』明海大学教養論文集：自然と文  
化 (26), 1-12, 2015-12